HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	文学作品の翻訳に見る異文化伝達法
Author(s)	高橋, 希衣
Citation	独語独文学研究年報, 37, 20-45
Issue Date	2011-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45313
Type	departmental bulletin paper
File Information	takahashi.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

文学作品の翻訳に見る異文化伝達法

高橋　希衣

1. 序

翻訳は、理解できない言語で書かれた作品を読む際に、重要な役割を果たす。ある作品を理解するためには、直接原文を読むことが最も望ましいが、原文の書かれた言語(原語)を理解できない場合は、翻訳されたテクストに依存せざるを得ない。翻訳書のみを読む読者が多い今日、翻訳の果たす役割はますます大きくなっている。翻訳者は、翻訳書を読む読者が原著を理解するための媒介であり、原著と読者との架け橋である。

この、異文化間の架け橋の一つの大きな役割である、日本文化をドイツ語で伝達することに以前から大きな関心を抱いてきた。日本とドイツ語圏の国々の間には、言語・文化の大きな差異があり、日本文化のドイツ語での伝達は決して簡単なものではないが、ドイツ語圏の人々との交流を通し、必須な事柄であると痛感してきたからである。日本人である私が、ドイツ語圏の人々にドイツ語圏の文化について説明を求めるのと同様に、ドイツ語圏の人々は、私に日本文化の説明を求める。私がドイツ語を用いて日本文化を説明する時、大きく異なる言語・文化を持っているドイツ語圏の人々に伝わるように、日本文化をドイツ語で表現しようとする。そして、それを彼らが理解した時に、異文化伝達が成功したことになり、私の伝達内容は、日本とドイツ語圏の国々との間の文化の差異をつないだことになる。

そこで、この異文化伝達が表れている対象として、日本文学のドイツ語訳書に注目した。すでに幾つもの日本文学の作品がドイツ語に訳されているが、翻訳者はどうやって日本とドイツ語圏間の言語・文化の差異を仲介し、伝達したのだろうか。異文化伝達に大きな関心を抱いている私にとって、この方法を分析することは、非常に興味深いこととなった。文学作品という文化が色濃く表れるテクストの翻訳において、翻訳者がどんな手段を用いたのかを探ることに、意義を感じたのである。

本稿では、森鷗外著『雁』と、その唯一のドイツ語訳書であるフリッツ・フォーゲルグザング(Fritz Vogelgsang)訳 *Die Wildgans* を分析対象とし、翻訳者がどんな手段を用いて日本とドイツ語圏の国々との間の言語・文化の差異を仲介、伝達したのか、または相互理解を促進したのかを具体例を用いて分析することを目的とする。[1]作品を選ぶ基準としては、

---

[1] 本稿では、森林太郎 『鷗外全集著作篇　第五巻』(岩波書店)　1951 年　所収の『雁』と、Mori, Ôgai: *Die Wildgans.* Roman Aus dem Japanischen übersetzt und mit einem Nachwort versehen von Fritz Vogelgsang. Zweite Auflage. Frankfurt am Main (Insel Verlag) 1991 を用いる。『雁』は、多くの媒体に収められているが、フォーゲルグザングがどこに所収されている『雁』を訳したかを *Die Wildgans* に一切記載していないことは、大きな問題であり、残念なことである。フォーゲルグザング(1930～2009 年)は、シュトゥットガルト(Stuttgart)出身のフリーの翻訳家、随筆家そして編集者であり、母語のドイツ語の他、スペイン語、カタロニア語、日本語、そして英語に通じていた。2001 年にはヨーロッパの言語圏の翻訳に対するヴィルヘルム・メルトン賞(Wilhelm – Merton – Preis für europäische Übersetzungen)、2008 年

ドイツ語圏でも比較的知名度があり、そのドイツ語訳書が多く出版されている作家の作品である、且つ、日本が舞台であり、日本文化の要素が多く含まれている作品を選ぶという基準を設定した。その結果、ドイツ滞在の経験や、「ベルリン・フンボルト大学森鷗外記念館 Mori – Ôgai – Gedenkstätte[2]」の存在により、ドイツ語圏でも知名度があり、その多くの作品がドイツ語に訳されているので、鷗外を選んだ。そして、彼の数ある作品の中でも、日本が舞台であり、日本文化が色濃く表れている作品である、『雁』を選択した。

翻訳分析方法には様々な方法が考えられるが、本稿では、日本とドイツ語圏の国々の言語・文化間の差異に着目し、日本語とドイツ語それぞれが持つ言語的な特徴により生まれる差異と、文化間にある大きな差異をどのように処理し、それらを伝達しているかということを具体例に当たって分析していく。

2. ドイツ語に翻訳されている森鷗外の作品

序において、多くの鷗外の作品がドイツ語に翻訳されていると述べたが、その実状をここで詳細に紹介する。

ドイツ語訳されている鷗外の作品を調べるために、The International House of Japan Library による *Modern Japanese literature in translation A Bibliography*（1979 年 ）[3]や、ベルリン・フンボルト大学森鷗外記念館による *Japonica Humboldtiana 2*（1998 年 ）[4]を調べたが、後者の方が新しい情報を含んでいる上に、鷗外の作品と西洋の言語のみに絞った翻訳情報について掲載しているので、後者の情報を採用する。鷗外のドイツ語訳された作品数を集計してみると、*Japonica Humboldtiana 2* が出版された 1998 年までの段階で、書簡や映像に関するものは除いて、鷗外作の 32 作品がドイツ語訳され、54 の出版物として出版されたということがわかった。鷗外が存命中（ つまり 1922 年以前 ）にドイツ語への翻訳が出版されたことがあるのかということにも着目してみた。大半の翻訳は死後に出版されているが、『舞姫』が 2 書、『仮面』が 1 書、そして『文づかい』が 1 書、鷗外の生前（1922 年以前 ）に、ドイツ語訳されていたことがわかった。最も古いドイツ語への翻訳は、Nomori

---

にライプツィヒ見本市賞（ Preis der Leipziger Buchmesse ）の翻訳部門賞を受賞する等、著名な翻訳者であった。

[2] ベルリン・フンボルト大学森鷗外記念館 Mori – Ôgai – Gedenkstätte は、1984 年に、鷗外来独百周年を記念して開館された施設で、フンボルト大学の日本文化研究センターZentrum für Sprache und Kultur Japans の一施設であって、翻訳作業を中心に学術活動を行っている。同記念館では、ヨーロッパの言語による鷗外に関する刊行物や鷗外の論文そして作品の翻訳等を見ることができる。さらに、鷗外が 4 年間のドイツ滞在時（ 1884～1888 年 ）に読んだ本の一部や鷗外と同時代の作家による作品も見ることができる（ ベルリン・フンボルト大学森鷗外記念館ホームページ: http://www.2.hu-berlin.de/japanologie/?jp=Rundgang_jp 参照 ）。ヨーロッパで最も充実した鷗外に関する情報を得られる施設である。

[3] The International House of Japan Library: *Modern Japanese literature in translation A Bibliography.* Tokyo, New York and San Francisco（ Kodansha International LTD. ）1979 pp. 160 – 163

[4] Mori – Ôgai – Gedenkstätte: *Japonica Humboldtiana 2.* 1998 http://www2hu-berlin.de/japanologie/dokumente/publikationen/ogaibibl.pdf

Usami 訳„Die Tänzerin. Japanischer Roman von Mori“であり、1907 年から 1909 年に渡って *Ost-Asien (Berlin)*に掲載された。

本稿で取り扱う『雁』は、1911 年から 1915 年にかけて執筆されたものであり、それをフォーゲルグザングが 1962 年にドイツ語訳したものが、*Die Wildgans* である。『雁』は、「壹」から「貳拾肆」までの章で構成されていて、「壹」から「貳拾壹」までは雑誌「スバル」に掲載され、「貳拾貳」から「貳拾肆」までは雑誌には掲載されずに、単行本として籾山書店から発行された時に書き加えられた[5]。*Die Wildgans* は、まず 1962 年に Insel Verlag から出版され、1991 年には第二版が出版されている。Suhrkamp Verlag からも、1984 年に出版されている[6]。

3. 日本文学のドイツ語訳に関する先行研究の一調査

本稿に取り組むにあたり、日本文学作品とそのドイツ語訳版を取り上げ、言語・文化間差異によって生じる問題を取り扱った先行研究について調査した。その結果、そもそも日本文学作品とそのドイツ語訳版を題材とした研究自体が、かなり希少だということが判明した。これは、第一に分析対象言語をドイツ語にしぼったこと、第二に分析対象書物のジャンルを文学のみに設定したことに大きく起因する。

日本文学の翻訳に関する研究というものは、英語との関係で行われていることが大多数だということを実感した。代表的な論文名や出版物名としては、ドナルド・キーン 「日本近代文学の外国語訳」、北條文緒 『翻訳と異文化　原作との＜ずれ＞が語るもの』、そして前田尚作 『日本文学英訳分析セミナー』が挙げられる[7]。キーンは、自らの豊富な翻訳経験を語り、「日本近代文学の中で一番訳しやすいジャンルは現代詩であろう[8]」とし、現代詩の英訳は「小説や戯曲または和歌や俳句に比べると成功率が高い。問題は原文の素質よりも英訳の表現である。つまり、難解さは国籍を問わずあらゆる現代詩共通の特徴であるから、詩を喜んで読むような読者は難解な翻訳を嫌う筈はない[9]」と説明している。そして、「日本現代文学の一番やりにくい翻訳は何かというと、戯曲であろう。せりふは平明であっても、自然に訳者の口から流れて来なければ駄目なので、正確な、優れた翻訳だけでは満足でき

---

[5] 森 『鷗外全集著作篇　第五巻』 後記 4 頁 12～13 行目

[6] 鷗外の代表作であり、興味深い長編小説である『雁』について、たった一人の翻訳者によるドイツ語訳しか出版されていないという現状は、驚きに値する。

[7] キーン, ドナルド 「日本近代文学の外国語訳」、雑誌『文学』編集部 『翻訳』所収、(岩波書店) 1982 年　171～176 頁　　北條文緒 『翻訳と異文化　原作との＜ずれ＞が語るもの』(みすず書房) 2004 年　　前田尚作 『日本文学英訳分析セミナー』(昭和堂) 2006 年　　英語に訳された日本文学作品に関する研究は多数存在するため、ここで挙げた論文名や出版物名は氷山の一角である。

[8] キーン　175 頁上段 7~8 行目

[9] 同上　8~12 行目

ない[10]」と続けている。つまり、ジャンルにより翻訳の難易度が変わるということを述べている。北條は、具体的な日本文学作品として、夏目漱石『こころ』、遠藤周作『沈黙』、村上春樹『羊をめぐる冒険』、そして吉本ばなな『キッチン』等、近現代小説を分析している。文化の要素に関する翻訳については、「特定の国の風物・風俗が翻訳困難だという場合、それは内在的理由によるというよりも、その国の国際的地位や、その国の文化がどれだけ他国に向かって開かれ、他国によって吸収されているかといった事情によるところが多い[11]」と説明している。そして、「日本文化の国際的知名度は、日本人の生活の欧米化の度合いに比べればはるかに及ばない[12]」とした上で、「『羊をめぐる冒険』の英訳において、日本の時代背景が削除された[13]」例を挙げ、「日本固有の風物の翻訳のむつかしさは依然存在していると言わねばならない[14]」と、興味深い見解を示している。すなわち、翻訳文化への背景知識の広さにより、翻訳の難易度が変動することを示しているのだ。それから、前田尚作は、北條と同じく、漱石、村上そして吉本等の作品を分析対象としているが、日本文学の翻訳現場において英訳者が「私たちの英文読解のように、一字一句にこだわる。だから、何気ない原文でも、深読みする。論理志向が強く、筋の通らない原文を自分流に手直ししてから訳す[15]」という実状を紹介し、原文と訳文をつき合わせて、両者間のずれが起こった理由を考えることの意義を主張している。つまり、細かに原文と訳文を見比べることの有意義さを訴えている。

ここまでは、日本文学の英語訳に関するあらゆる角度からの見解を紹介した。以下、本稿での本題である日本文学のドイツ語訳に関する先行研究について、現段階での調査結果を幾つか紹介する。イルメラ・日地谷・キルシュネライト、平野栄久、徳永光展、並びに藤濤文子の著作について取り上げることとする[16]。日地谷・キルシュネライトは、「ドイツだけでなく、日本においても広く、日本語は結局翻訳不可能であると信じられている[17]」ことに気付いたが、ある言語が翻訳不可能であるなどということはあるのだろうかと、疑問を投げかけ、「現在の多言語文化において立てられた根本原理によれば、翻訳可能性こそが言語の主要な特徴であり、日本語だけがそのプロセスにおいて例外であり、他言語よりも近寄るのが難しいとは言えない[18]」としている。そして、「日本語からの翻訳は必ずしも絶

---

10 キーン　下段 14~16 行目
11 北條　87 頁 3~6 行目
12 同上　14~15 行目
13 同上　21 行目
14 同上　22~23 行目
15 前田　i 頁 20~22 行目
16 http://www.japan.de によると、日地谷・キルシュネライトは、日本文学、比較文学、翻訳学等を、http://jglobal.jst.go.jp によると、平野は、日本の戦後文学、ドイツと日本の戦後文学の比較研究等を、徳永は、日本近代文学、比較文学等を、そして藤濤は、翻訳理論を専門領域としている。各人の専門領域には重なる部分と重ならない部分があるため、彼等の日本文学のドイツ語訳に対する研究態度を調べること自体も、大変興味深いことである。
17 日地谷・キルシュネライト, イルメラ 「日本文学の翻訳は不可能か」（ 講談社 ） 1994 年　183 頁下段 7~9 行目
18 日地谷・キルシュネライト　184 頁上段 3~5 行目

望的ではない、それが苦労が多く危険窮まりない、しばしばあまりわりの良くない仕事である事は認めねばならないが。しかしそれは、文学の翻訳全てについて言える事であろう[19]」とも述べ、「それぞれの時代は、それぞれ自らの翻訳を持っており、最終的または決定的な翻訳というものはない。しかし一般的に見て、日本の詩歌や小説の最近のドイツ語訳は、過度に装飾的でも芝居がかってもいず、学問的にもより正確[20]」であると主張している。「日本語は恐ろしく難しい言語[21]」であり、ドイツ語圏の人々と「日本文学の間に、大きな距離が存在している[22]」ということを理由とし、日本文学のドイツ語への翻訳の不可能性を主張したがる傾向も残っているが、自らも翻訳者であるという立場から、翻訳の際にぶつかる問題の解決法を幾つか紹介することにより、時代による変遷を経て、日本文学のドイツ語訳が正常に行われるようになっていることを示しているのである。平野は、自身の著作がドイツ語と英語に訳され、数名の日本人作家の作品のドイツ語訳を詳細に検討したという翻訳に関わった経験があり、その結果、「対象語に精通した訳者によるなら多少のニュアンスの相違は別にして、理論文はかなり正確に翻訳できる[23]」という結論に達している。それに対して、小説の翻訳に関しては、漱石 『夢十夜』の二名の翻訳者による翻訳の比較、具体的には、題名の訳し方の比較、現在形か過去形かの時制選択の比較、そして元号の訳し方の比較を試みたことにより、「この訳書のどちらを読んだかによって、漱石の文体や表現法にたいして、かなり違った感触を受けるだろう。ベルント、ブラシュ両氏の主体的な判断・選択・工夫を通過しているからである。小説の翻訳には訳者の創造性が必要だ。創造をとおしてしか伝わらないものがある[24]」とし、「小説の翻訳とは、原文をテキストにした半ば創造である[25]」とまで述べている。つまり、ジャンルにより翻訳の難易度は異なるし、とりわけ文学作品の翻訳というものにおいては、翻訳者により大きく異なる翻訳文が生み出されると主張しているのである。徳永は、「リュッセルスハイム 1972 ―日本学の歴史的回想―[26]」によると、1972 年のリュッセルハイムでの第 1 回大会以降、ドイツ語圏での日本学に関する総合的な研究発表の場である、ドイツ語圏日本学会(Deutschsprachiger Japanologentag)の第 10 回記念大会(1996 年 10 月 9~12 日)に参加する等、日本文学のドイツ語訳についての現状のみならず、ドイツ語圏における日本学の動向全般に関心をよせている。徳永の具体的な研究には、漱石 『坊っちやん』のドイツ語訳の一つである、「ユルゲン・ベルント(Jürgen Berndt) / 篠原正瑛共訳のテクストを取り上げ、ドイツ語圏日

---

19 同上 190 頁上段 12~16 行目
20 同上 190 頁下段 12~17 行目
21 同上 183 頁下段 10~11 行目
22 同上 184 頁上段 6 行目
23 平野栄久 「翻訳についての一考察 ―体験的・実感的に―」 (昭和堂) 1998 年 257 頁 8~9 行目
24 同上 263 頁 3~5 行目 ここに登場する「ベルント、ブラシュ両氏」とは、『夢十夜』をドイツ語訳した、Jürgen Berndt と Heinz Brasch のことである。
25 同上 6 行目
26 オールピッツ, フリッツ 「リュッセルスハイム 1972 ―日本学の歴史的回想―」 徳永光展訳 2000 年 123～137 頁

本文学の第一人者に『坊っちやん』の日本的な部分がどのように理解され、評価されたかを跡付ける[27]」ことを目的とし、「タイトルの翻訳や後記(Nachwort)を中心に作品受容の様子を探る。また、註(Anmerkungen)を日本文化理解の様態を示す資料として位置付け、訳出を試み[28]」ているものがある。『坊っちやん』というタイトルの翻訳については、幾つかの言語への翻訳において、「音訳するもの、音訳と直訳調の単語を併記するもの、直訳調の単語に置き換えるもの、思い切った意訳をするもの[29]」という大きく分けて 4 つのパターンが存在するとしている。そして、「ベルントが採用した*„Der Tor aus Tokio“*が他に例のない独特の訳語であることが明らかとなる。*„Botchan“*で日本語を解さぬドイツ語圏の読者に作品や主人公についてのイメージを持たせるのは不可能であり、それ故貴重な読者を逃してしまうこともあり得よう[30]」と述べている。つまり、思い切った意訳をし、多くの読者を取り込んでいるこの訳を支持している。注については、「註がこのテクストに豊富に存在する事実は、〈日本文学を翻訳することを通して、自分の国の人々に、日本に親しんでもらい、できれば、日本を理解してもらったり、あるいは理解しやすくすることを自分の課題としてきた〉ベルントの野心的な初期の業績として高く評価されるものである[31]」とし、その価値の大きさを訴えている。さらに、徳永は、漱石 『草枕』のドイツ語訳である Natsume Sôseki, *Das Graskissen – Buch* übersetzt von Christoph Langemann, edition q Verlag, Berlin 1996(英語訳も用いていることがある)において注が記述されている箇所と、『漱石全集　第三巻』(岩波書店　1994 年)における注の箇所との比較を通して、「註として岩波書店版全集になく独訳にある項目が、ドイツ人には奇異に映る項目といえるが、それらの大半は日本の固有名詞乃至は生活文化に関わる語彙である。その中で英訳との重なりを見ることで欧米文化圏ではどうしても説明を必要とする事項を確定することができよう[32]」と、興味深い見解を示している。それから、翻訳理論を専門領域としている藤濤については、紹介したいことが数多くあるのだが、他の研究者の紹介との釣り合いや紙面の制限との関係があるため、ここでは同氏の研究を取り上げる上で最も重要であり中心的だとおもわれる箇所を抜粋して紹介することとする[33]。まず藤濤は、「できる限り起点テクスト(source

---

27 徳永光展 「『坊っちやん』にみる日本　―独訳*„Der Tor aus Tokio“*をめぐって―」(笠間書院) 1997 年　252 頁 2~4 行目

28 同上　5~6 行目

29 同上　254 頁 14 行目~255 頁 10 行目

30 同上　255 頁 11~13 行目

31 同上　260 頁 15~18 行目　〈　〉内については、「『坊っちやん』にみる日本　―独訳*„Der Tor aus Tokio“*をめぐって―」の注 7)参照。

32 徳永光展 「独訳『草枕』の脚註　―日本事情的語彙の解説をめぐって―」(両輪) 2001 年　473 頁下段 22 行目~474 頁 3 行目

33 以下の 6 つの著作を主に用いる。

藤濤文子 「翻訳評価のためのコミュニケーション的分析」(神戸大学ドイツ文学論集刊行会) 2000 年 41~64 頁　　鈴木文子(藤濤文子)『日本文学のドイツ語訳に見る異文化間コミュニケーション行為の事例研究』(平成 14 年度~平成 15 年度科学研究費補助金　基盤研究　((C))　((2))　研究成果報告書)

text = ST)に対して忠実で正確な翻訳、という一般的な考え方がある。これは翻訳を ST の正確な再現であるべきだ、との捉え方に、つまり翻訳の言語学的モデルで広まっている捉え方に理論的基盤を持っている[34]」という現状を示した上で、原文に忠実だということを翻訳評価の基準とする原文中心主義によってのみ、翻訳を評価すべきではない、という立場に立ち、「翻訳とは決定プロセスである。訳文決定に関与する要因は様々あろう。翻訳者の個人的資質や能力といった主観的・偶発的要因も大きいものの、コミュニケーションの諸要素が翻訳行為に影響を与える。同一 ST であっても、受容者や媒体、テクストタイプなどが変われば、訳文決定に変化が生じる。TT がコミュニケーションの諸要素の影響を受けて成立する産物である以上、評価についても、翻訳をコミュニケーションと捉える立場からなされるべきである[35]」と考えている。つまり、翻訳は人間の一行為であり、人間の行為には必ずコミュニケーションが絡むため、翻訳がどのような目的をもってなされたのかを翻訳の評価基準とすべきであるという立場に立っているのである。この翻訳の目的が最も重要であるとする立場を「スコポス理論[36]」という。この理論では、翻訳を「言語コード転換としては捉えない。翻訳とは、起点言語文化の情報提供(ST)について目標言語文化内で情報提供することだと考える。文化的な要素を重視するが、動的等価や同化翻訳を推奨するのではなく、文化の差異をどのように越えて情報提供するかは、他の行為と同様に目的や受け手に応じて変わりうるものだとしている。つまり目的という変数に応じて変化する関数だとして、『翻訳行為 = f (目的)』という公式で表している。翻訳の目的を表す専門用語として導入された„Skopos“は受容者を含む概念でもある。また TT に結束性があり想定読者にとって理解可能であることが ST への忠実性よりも重視される[37]」のである。したがって、このスコポス理論における「第 1 ルールは、翻訳行為という相互行為(Interaktion)はその目的により決定され、目的の関数となっているという『スコポス・ルール(Skoposregel)』[IA / Trl = f (Sk)]である。ちなみに受容者は目的の構成要素であり、目

2004 年　藤濤文子 「翻訳評価における注のコミュニケーション機能について」、(神戸大学ドイツ文学論集刊行会) 2004 年 27~38 頁　藤濤文子 「日独翻訳にみる異文化コミュニケーション行為」(神戸大学ドイツ文学論集刊行会) 2005 年 31~50 頁　藤濤文子 『翻訳行為と異文化間コミュニケーション —機能主義的翻訳理論の諸相—』(松籟社) 2007 年　藤濤文子 「比喩表現の翻訳について」(神戸大学ドイツ文学論集刊行会) 2007 年 31~53 頁

34 藤濤 「翻訳評価のためのコミュニケーション的分析」 41 頁 8~11 行目

35 同上 14~20 行目 TT とは、target text(翻訳テクストもしくは目標テクストと訳される)のことである。

36 スコポスとは、ギリシャ語の skopós に由来する語で、„Ziel“つまり「目標、目的」を意味する。

37 鈴木 『日本文学のドイツ語訳に見る異文化間コミュニケーション行為の事例研究』18 頁 6~14 行目 ここでの結束性概念は、「想定読者がその受容状況の中で理解可能であること」を意味する(『日本文学のドイツ語訳に見る異文化間コミュニケーション行為の事例研究』 18 頁注 8 参照)。藤濤が「翻訳評価のためのコミュニケーション的分析」 46 頁 8~11 行目において、「翻訳コミュニケーション行為を成功させるためには、スコポス理論の指摘が重要であると認められるものの、批判される場合の最大のポイントは、ST を王座の地位から引きずり降ろして、単なる『情報提供』だとみなした点である」とも述べて、スコポス理論の問題点について言及している点も、注目に値する。

的は受容者に依存する[Sk = f (E)]。第 2 ルールは、TT が十分に結束性があり、受容状況において受容者が解釈できるという『結束性ルール(Kohärenzregel)』である[38]」。そして、「第 3 は、ST と TT が関連し合っているというテクスト間の関係を表す『忠実性ルール(Fidelitätsregel)』である[39]」。このスコポス理論に基づいて、藤濤は幾つかの日本文学作品とそのドイツ語訳を分析している。ある程度長いまとまった分析結果が示されている分析対象日本文学作品は、吉本 『キッチン』、『満月―キッチン 2』、『ムーンライト・シャドウ』、『TUGUMI』、村上 『ノルウェイの森』、そして漱石 『吾輩は猫である』である。『キッチン』、『満月―キッチン 2』、『ムーンライト・シャドウ』では訳者注を分析点とし、『TUGUMI』と『吾輩は猫である』では作品中の比喩表現を、そして『ノルウェイの森』では作品の第一章を、それぞれ分析範囲としている[40]。この中で、「訳者注が必要となる理由の大半が文化差にある[41]」という前提での分析である、『キッチン』、『満月―キッチン 2』、そして『ムーンライト・シャドウ』の訳者注に関する分析が、最も文化の差異に着目しているため、筆者にとって関心が特に大きい。

先行研究を調査した結果、作品全体を対象とし文化の細かな差異に着目した、日本文学作品とそのドイツ語訳の研究が少ないのではと考えるようになった。文化の差異に着目する研究においては、それが大きく表れるものとして訳者注を分析対象とする傾向が見られるようである。しかし、訳者注というものは、必ず付けられているものではないし、日本文学のドイツ語訳においてはむしろ付けられていないことの方が多いようにおもわれる。現に、本稿で扱う *Die Wildgans* にも、注は皆無である。そして、分析対象とされる作品については、おそらく新しい作品が増えていくようにおもわれる。これは、翻訳書が増えるということ、その翻訳書を読む読者が増えるということと密接に関連しているため、当然のことであろう。しかし、現代を舞台とした新しい作品には、日本文化に特有の要素があまり含まれていない可能性が高いため、この点への着目が薄れてしまう。当然、注やタイトル、そして比喩表現の分析も大変興味深いが、本稿においては敢えて作品全体を分析対象とした上で、明治時代の文学作品という比較的古い作品を選ぶことにより、現代を題材にした作品にはあまり表れ得ない、日本文化特有の要素のドイツ語での伝達方法も含め、「現代のドイツ語圏の読者が翻訳文を読むことを前提として、翻訳者がその理解を促すために、どのような手段を用いて言語・文化の差異を乗り越えたのか」をテーマに、言語・文化の差異に着目した分析を試みる。

---

38 藤濤 「翻訳評価のためのコミュニケーション的分析」 45 頁 23~28 行目

39 同上 46 頁 3~5 行目 つまり、スコポス理論の「ST と TT が関連し合っているというテクスト間の関係」が、翻訳の目的や受容者の理解可能性よりも重視されないという点が、従来の翻訳評価とは大きく異なる点なのである。

40 鈴木 『日本文学のドイツ語訳に見る異文化間コミュニケーション行為の事例研究』、藤濤 「翻訳評価における注のコミュニケーション機能について」、藤濤 「日独翻訳にみる異文化コミュニケーション行為」、藤濤 『翻訳行為と異文化間コミュニケーション ―機能主義的翻訳理論の諸相―』、そして藤濤 「比喩表現の翻訳について」参照。

41 藤濤 『翻訳行為と異文化間コミュニケーション ―機能主義的翻訳理論の諸相―』 95 頁 9~10 行目

4. 文学作品の翻訳に見る異文化伝達法　―『雁』と *Die Wildgans* の具体例分析―

日本の明治時代を舞台とした作品である『雁』を現代のドイツ語圏の読者に読ますという前提で翻訳を手掛けた翻訳者が、日本とドイツ語圏の国々との言語・文化の大きな差異を翻訳という行為で仲介し伝達するために、用いている手段とその理由や効果を中心に分析する。この分析は、異文化コミュニケーションの一つのヒントとなるであろう。

まず、分析点を大きく語彙レベルの分析と文章レベルでの分析に分ける。語彙レベルの分析では、語彙に関する問題に焦点をしぼり、日本とドイツ語圏の国々の文化の差異が大きく表れる、日本文化の要素の表現方法を分析する。日本文化の要素とは、香の物や火鉢等、ドイツ語圏の文化には元々存在しない、日本文化には存在する要素を意味する。この日本文化の要素を翻訳者がどう訳しているかを調べ分類することにより、翻訳者が異文化である日本文化を、ドイツ語圏の読者にどのように伝達しようとしているかを考察する。次の文章レベルでの分析では、日本とドイツ語圏の言語と文化の差異が表れる、省略、加筆、そして誤訳について分析する[42]。

4. 1. 語彙レベルでの分析

日本とドイツ語圏の文化の差異が主な問題となる、日本文化の要素の表現方法を分析する。翻訳者が、どう日本文化の要素を訳しているかを調べ分類することによって、異文化である日本文化をドイツ語圏の人々に伝達するためにはどのような手段が考えられるかを知り得るからである。具体的な例の分析を全文通して行ったが、その数は膨大であり全てを掲載することは不可能であるため、本稿では紙面の関係上、幾つかの事例を抜粋することとする。以下、ドイツ語圏文化の要素での直接的な訳出、ドイツ語圏文化の要素での説明的な訳出、並びに外来語での訳出の各々に当てはまる事例を紹介していく[43]。

A1）ドイツ語圏文化の要素での直接的な訳出

A1 – 1） 袷（342 頁 10 行目, 343 頁 5 行目 ）

Herbstkleider (79 頁 4 行目, 79 頁 24 行目)

複数形でのみ登場した。「袷（あわせ）」とは、『日本国語大辞典[44]』によると、「裏地のついている

---

42 省略とは、「ST の要素を全く削除する」ことであり、加筆とは、「ST に含まれていない要素を加える」ことである(藤濤 『翻訳行為と異文化間コミュニケーション　―機能主義的翻訳理論の諸相―』 141 頁 表 2 参照)。ST とは Source Text「起点テクスト」の略称であり、翻訳される対象である原文のことであり、対立概念は、翻訳文である、Target Text 「目標テクスト」である。

43 上段に原文『雁』における表現を、下段に翻訳文 *Die Wildgans* における表現を記す。尚、括弧内の頁数と行数は、森林太郎 『鷗外全集著作篇　第五巻』 (岩波書店) 1951 年と Ôgai Mori: *Die Wildgans.* Roman Aus dem Japanischen übersetzt und mit einem Nachwort versehen von Fritz Vogelgsang. Zweite Auflage. Frankfurt am Main (Insel Verlag) 1991 のものであり、その事例が載っている最初の頁数と行数である。

44 日本国語大辞典第二版編集委員会小学館国語辞典編集部 『日本国語大辞典　第二版』 2001~2002 年

衣服。近世では陰暦四月一日より五月四日まで、および九月一日より八日まで、これを着るならわしであった。現在では、秋から冬を通して春まで着る」ものである。*Duden*[45]の„Herbstkleid“についての記述は、„wärmes, im Herbst getragenes Kleid. 「秋に着る暖かい衣服。」“である。

A1 – 2) 蕎麦（292 頁 8 行目, 389 頁 7 行目, 411 頁 5 行目 ）

Nudelsuppe (25 頁 18 行目, 123 頁 19 行目, 142 頁 16 行目)

Duden[46]の„Nudelsuppe“についての記述は、„Fleischbrühe mit Nudeln [Gemüse u. Fleisch]. 「麺[と野菜そして肉]入りのブイヨンスープ。」“である。

A2) ドイツ語圏文化の要素での説明的な訳出

A2 – 1) 香の物（364 頁 13 行目 ）

etwas Eingemachtes als kleine, würzige Zugabe (100 頁 19 行目)

「香の物」とは、『日本国語大辞典[47]』によると、「漬物」であり、„Eingemachte“とは、*Duden*[48]によると、„(in Gläsern, Dosen, u. Ä. aufbewahrte) durch Einmachen, Einlegen in eine Lake o. Ä. haltbar gemachte Lebensmittel (bes. Obst). 「(グラス、缶その他これに類するものの中で保存されて) 塩漬け用塩水等の中で漬けられたり貯蔵されたりして、持ちを良くされた食料 (特に果物)。」“である。したがって、„etwas Eingemachtes als kleine, würzige Zugabe“は、「薬味の利いた小さな添え物としての、塩漬け用塩水等の中で漬けられたり貯蔵されたりして、持ちを良くされた食料」である。

A2 – 2) 肱掛窓（277 頁 10 行目 ）

ein in Sitzhöhe angebrachtes, zum Hinausschauen bestimmtes Fenster (15 頁 26 行目)

「肱掛窓（ひじかけまど）」とは、『日本国語大辞典[49]』によると、「すわった姿勢で肘をかけられるくらいの高さの位置に、外側に張り出してつくった窓」である。そして、„ein in Sitzhöhe angebrachtes, zum Hinausschauen bestimmtes Fenster“は、「窓の外を見るために、座った高さに取り付けられた、一定の窓」である。

B) 外来語での訳出

外来語とは、「他の言語から借用(Entlehnung)された単語で、受け入れ側の言語体系に完全には同化していないために、外国語に由来する語であることが平均的な母語話者にわ

---

45 *DUDEN Das große Wörterbuch der deutschen Sprache in 10 Bänden.* Mannheim, Leipzig, Wien und Zürich (DUDENVERLAG) 1999

46 同上

47『日本国語大辞典　第二版』

48 *DUDEN Das große Wörterbuch der deutschen Sprache in 10 Bänden.*

49『日本国語大辞典　第二版』

かる単語[50]」である。

B – 1) 俳句（273 頁 4 行目 ）

Haiku（11 頁 12 行目 ）

„Haiku“についての *Duden*[51]の記述は、„aus drei Zeilen mit zusammen 17 Silben bestehende japanische Gedichtform. 「17 の綴りで結ばれていて、3 行から構成されている、日本の詩形。」“である。

B – 2) 火鉢（315 頁 12 行目, 395 頁 10 行目 ）

Hibachi（54 頁 10 行目, 128 頁 32 行目 ）

„Hibachi“は、*Duden*[52]と *DUDEN Das Fremdwörterbuch*[53]には記載がないが、*Kleines Lexikon Deutscher Wörter japanischer Herkunft von Aikido bis Zen*[54]における、„die rund 500 Wörter, die im Verlauf des 20. Jahrhunderts aus dem Japanischen entlehnt wurden und Eingang in deutsche Wörterbücher gefunfen haben「20 世紀の中で、日本語から借りられ、ドイツ語の辞書へと入れられた、約 500 語」[55]“に含まれている。同書 S. 68 の„Hibachi“についての記載の一部は、以下の通りである。

Hibachi der oder das: Feuerbecken, aus *hi*, Feuer, und *hachi*, Schüssel, Becken
Im traditionellen japanischen Haus gab es keine Heizung. Die Sorge der Japaner galt eher der Sommerhitze, gegen die man sich nicht durch Kleidung schützen konnte. Ein transportables Becken, in dem Holzkohle glühte, war die einzige Wärmequelle im Winter. 「伝統的な日本家屋には、暖房が存在しない。日本人は、どちらかと言えば衣服を用いても対抗することのできない夏の暑さの方を、不安視していた。木炭をその中で燃やす持ち運び可能な鉢は、唯一の冬の暖房源であった。」

ドイツ語圏文化の要素での直接的な訳出として、「袷」と„Herbstkleid(er)“、そして「蕎麦」と„Nudelsuppe“を事例として挙げた。これらのドイツ語での表現は、その要素自体がドイツ語圏文化に存在する要素であり辞書にも記載がある通常に用いられているものであるため、ドイツ語圏文化の要素での直接的な訳出という枠組みに分類した。言い換えれば、つまり、これらの日本文化の要素をそれに似通っていると考えられるドイツ語圏文化の要素で置き換えたということになる。当然、文化間差異があるため、それらの表現が表す対

---

50 編集顧問　岩崎英二郎、池上嘉彦、Prof. Dr. Franz Hundsnurscher　編集主幹　川島淳夫　編集副主幹　橘好碩、麻生建　責任編集委員　荻野蔵平、木藤冬樹、幸田薫、島田勝、吉田有 『ドイツ語言語学辞典』（ 紀伊國屋書店 ） 1994 年

51 *DUDEN Das große Wörterbuch der deutschen Sprache in 10 Bänden.*

52 同上

53 *DUDEN Das Fremdwörterbuch Band 5.* Mannheim, Leipzig, Wien und Zürich (DUDENVERLAG) 1997

54 Haschke, Barbara / Thomas, Gothild: *Kleines Lexikon Deutscher Wörter japanischer Herkunft von Aikido bis Zen.* München (Verlag C. H. Beck) 2008

55 同上　S. 2 Z. 3 – 6

象が全く同じになるということは期待できないが、この訳出方法には、翻訳文の読者にとって馴染みのある表現が用いられることになるので、テクストの理解が容易且つスムーズになるという利点がある。続いて、ドイツ語圏文化の要素での説明的な訳出としては、「香の物」と„etwas Eingemachtes als kleine, würzige Zugabe“、並びに「肱掛窓」と„ein in Sitzhöhe angebrachtes, zum Hinausschauen bestimmtes Fenster“を挙げた。これらは、前述の訳出方法と同じくその要素自体がドイツ語圏文化に存在する要素であり通常に用いられている表現を用いているが、その訳出法が単に一語で置き換えるのではなく、要素がどのようなものか細かく描写して説明しているという特色を持つ。つまり、例えば、類似する要素が翻訳文化には存在しない、もしくは類似性が少ないというような場合には、直接的な訳出という手段を用いることが困難であるため、この訳出法が有効となる。著しく長い訳にならない限り、読者のテクスト理解の妨げにはならず、原文文化を詳しく知ることの手助けになるであろう。最後に、外来語での訳出の各々に当てはまる事例として、「俳句」と„Haiku“、そして「火鉢」と„Hibachi“を挙げた。これらは、その要素自体はドイツ語圏文化には存在しないが、外来語としてドイツ語に入っているものである。この訳出法は、翻訳文の読者がその表現を理解できるのであれば、異文化の情緒を感じることが可能になるという利点を持っている。したがって、ドイツ語圏においてある程度知名度を保持していると判断できる要素については、外来語として訳出することも充分効果的である。

これらの訳出法はその翻訳書がどのような読者を対象としているか、そしてどのような目的で翻訳をされることとなったのかという理由によって、選ばれる頻度が変わると考えられる。例えば、日本学の研究家を対象に訳す場合には外来語を多用する可能性があり、反対に一般的な読者に異文化への理解よりも小説をたのしませることが目的ならば、翻訳文化に存在している要素での訳出を重視するであろう。全体を通して *Die Wildgans* を分析した印象としては、注が全く付けられていないということもあるが、外来語での表現は比較的少なく、ドイツ語圏文化の要素での訳出がより頻繁に用いられていたようである。したがって、一般的な読者がこの翻訳文を小説として読み易かったのではないかとおもえる。

4. 2. 文章レベルでの分析

ここからは、文章レベルでの分析である、省略、加筆、そして誤訳に入る。省略、加筆では、翻訳者が翻訳書の読者であるドイツ語圏の人々に彼等の文化とは大きく異なる日本文化をどのように伝達しようとしているのかを、その工夫を凝らしたもしくは努力した痕跡を追う。誤訳については、省略と加筆とは異なり、どういった要素が異文化伝達において誤解を招き得るのかといった視点からの分析を行う。語彙レベルでの分析同様、具体的な例の分析を全文通して行ったが、その数はあまりに膨大であり全てを掲載することは不可能なため、本稿では紙面の関係上、一部を抜粋してまとめていくこととする。

4. 2. 1. 省略

省略とは、「ST の要素を全く削除する[56]」ことである。省略をするということは、原文に翻訳者が独自の判断で手を加えることなので、その効果は読者の翻訳文理解にとって有益でなくてはならない。原文中心主義の考え方に基づくと、ST の要素を全く削除するという行為は原文への忠実性を大きく欠く行為となるため、当然否定的な行為だと位置付けられる。それに対して、翻訳をコミュニケーションと捉える立場であるスコポス理論の立場に立つと、翻訳がその目的に応じて変化するという考え方をするため、省略を必ずしも否定的な行為とは捉えない。本稿では、省略を規模に準じて文単位の省略と、それ以下の省略に大きく分類し、個々の事例がなぜ省略されたのかを分析し、その理由により事例を分類する。尚、事例中の下線部の付してある部分が省略されている部分である[57]。

A）文単位の省略

文単位の省略は原文テクストの内容を大幅に変え得るため、事例数が少ないことが予想される。*Die Wildgans* においてもその数はやはり少なかったが、少ないながらも、省略された理由に基づいて事例を分類する。

A1）日本語とドイツ語間にある言語上の差異による省略

A1 – 1) 末造は座布団の上に据わつて、烟草を吸ひ附けながら、優しい聲で云つた。

「どうしたのだ。まだ寝ないでゐるね。」

お上さんは默つてゐる。

末造も再び讓歩しようとはしない。こつちから孃和を持ち出したに、彼が應ぜぬなら、それまでの事だと思つて、わざと平氣で烟草を呑んでゐる。

「あなた今までどこにゐたんです。」お上さんは突然頭を持ち上げて、末造を見た。奉公人を置くやうになつてから、次第に詞を上品にしたのだが、差向ひになると、ぞんざいになる。やうやう「あなた」丈が維持せられてゐる。

末造は鋭い目で一目女房を見たが、なんとも云はない。（330 頁 1 行目 ）

Er hockte sich nieder, und während er sich eine Zigarette anzündete, fragte er freundlich：>>Was ist los? Du schläfst noch nicht?<<

Seine Frau schwieg. >Ich werde ihr nicht noch ein zweites Mal entgegenkommen< , sagte er sich. >Wenn ich die Friedenshand ausschlägt, die ich ihr hingestreckt habe, dann ist die Sache für mich erledigt.< Und er sog mit betontem Gleichmut an seiner Zigarette.

>>Wo bist du bis jetzt gewesen?<<

Mit einem Ruck hatte die Frau den Kopf gehoben und starrte ihm ins Gesicht. Seitdem eine Magd im Hause diente, bemühte sie sich um eine feinere Ausdrucksweise; sobald sie jedoch unter vier Augen waren, ließ sie alle Höflichkeit fallen.

Suezo musterte sie mit einem scharfen Blick, sagte aber nichts.（67 頁 13 行目 ）

---

[56] 注 42 参照。

[57] 注 43 参照。

末造が帰宅すると、普段は眠っているはずの妻が起きていて二人の会話が始まる場面である。「やうやう『あなた』丈が維持せられてゐる。」という一文が省略されている。この省略の理由は、日本語とドイツ語間にある差異である。原文の「あなた今までどこにゐたんです。」というお上さんの発言は、翻訳文においては>>Wo bist du bis jetzt gewesen?<<と訳されている。ドイツ語の二人称の人称代名詞には親称„du“と敬称„Sie“が存在するが、ドイツ語における人称は、丁寧さよりも親しさで選択される傾向が強いため、夫婦という親しい関係において„Sie“ではなく„du“で呼び合うのが通常であるという考えに基づき、この場面での日本語の「あなた」をドイツ語で„du“と訳したのであろう。したがって、この文を訳すことが不可能になったのであろう。つまり、せざるを得ない省略であったのだ。

A1 – 2) お上さんは小さい目を赫かして、熱心に聞いてゐたが、此時甘えたやうな調子でかう云つた。「それはお前さんの云ふ通りかも知れないけど、そんな女の所へ度々行くうちには、どうなるか知れたものぢやありやしない。どうせお金で自由になるやうな女だもの。」お上さんはいつか「あなた」を忘れてゐる。

「馬鹿言へ。己がお前と云ふものがあるのに、外の女に手を出すやうな人間かい。…」（335 頁 7 行目 ）

Seine Frau hatte mit gespannter Aufmerksamkeit zugehört, während es in ihren kleinen, schmalen Augen zu blitzen begann. In kokettierendem Ton erwiderte sie:

>>Was du sagst, kann schon sein. Aber was dabei herauskommt, wenn einer öfters das Haus einer solchen Frau besucht, das weiß man ja. Das gibt' s nicht! Gewiß ist sie auch so ein Weib, das für Geld zu haben ist.<<

>>Unsinn! Bin ich etwa der Mann dazu, mich mit einer anderen Frau zu befassen, wo ich doch dich habe? ...<< (72 頁 10 行目)

A1 – 1)に続く場面であり、「お上さんはいつか『あなた』を忘れてゐる。」という一文が省略されており、同じく日本語「あなた」とドイツ語„du“との関係が問題になる。A1 – 1)において、すでにお上さんは末造を„du“で呼んでいる。さらに、A1 – 1)で述べたように、ドイツ語においては夫婦間では„du“を用いた会話が自然であると考えられるため、原文の「あなた」から「お前さん」へという変化を表すことが翻訳文では困難である。そのため、この変化をドイツ語では表すことができないという考えに基づき、この文を省略したのであろう。これら 2 つの事例には日本語とドイツ語間にある言語上の差異が、省略の理由になることが顕著に表れていて、大変興味深い。

A2）日本文化圏の事象に関する背景知識の差の考慮による省略

父親は池の端に越して來てから、暫く立つうちに貸本を讀むことを始めて、晝間はいつも眼鏡を掛けて貸本を讀んでゐる。それも實録物とか講談物とか云ふ「書き本」に限つてゐる。此頃讀んでゐるのは三河後風土記である。これは大ぶ冊數が多いから、當分此本丈で樂めると云つてゐる。貸本屋が「讀み本」を見せて勧めると、それは嘘の書いてある本だらうと云つて、手に取つて見ようともしない。（388 頁 6 行目 ）

Seit er in Ikenohata wohnte, war er eifriger Kunde einer Leihbücherei und saß den ganzen Tag, mit der Brille auf der Nase, über einem Buch. Er laß nur die Schilderungen historischer Begebenheiten und Biographien. Empfahl ihm der Besitzer der Leihbücherei irgendeinen Roman oder sonstige Werke der Dichtkunst, so sagte er: >>Ach, das sind sicherlich so verlogene Geschichten<< , und nahm das Buch erst gar nicht in die Hand.（122 頁 15 行目 ）

お玉の父親の生活における習慣を記述した場面である。「此頃讀んでゐるのは三河後風土記である。これは大ぶ冊數が多いから、當分此本丈で樂めると云つてゐる。」という連続する 2 文が、省略されている。双方の文は、「三河後風土記」という日本文化圏の事象に関する固有名詞について述べている。これらの部分が省略された理由は、ドイツ語圏の読者にとってこの書名は馴染みの無いものと考えられる上に、これらの部分の前後の文においても書物に関する記述があるため、省略可能であると考えたということであろう。原文を日本語で読み得る読者と翻訳文の読者では、日本文化圏の事象に関する知識の幅に大きな差が存在する。藤濤は、「読者の背景知識や関心の差[58]」から、省略という方法が適切であると判断され得ると述べている。省略理由は、ドイツ語圏読者の日本文化圏の事象に関する背景知識を考慮したことと見なせるであろう。加えて、翻訳者が注を一切付けないという方針を採っていることも大きく関係するとおもわれる。このような翻訳文の読者にとって馴染みが無く理解が困難であると考えられる固有名詞に関しては、訳者注で解説する傾向が強いからである。

B）それ以下の省略

それ以下の省略は、文単位の省略よりはテクストの内容の変化への影響が小さいため、事例数が増えることが予想される。*Die Wildgans* においてもその数は群を抜いていたが、幾つかを抜粋し、省略された理由に基づいて事例を分類する。

B1）日本とドイツ語圏の間にある言語と習慣上の差異による省略

そこへ末造が這入つて來た。お常はわざとらしく取り上げた團扇の柄をいぢつて默つてゐる。

「おや。又變な樣子をしてゐるな。どうしたのだい。」上さんがいつもする「お歸りなさい」と云ふ挨拶をしないでゐても、別に腹は立てない。機嫌が好いからである。（345 頁 4 行目 ）

Da trat Suezo ins Zimmer. Otsune spielte absichtlich mit dem Stiel des Fächers, den sie in der Hand hielt, und schwieg.

>>Du lieber Himmel, schon wieder ein schiefes Gesicht? Was ist los?<<

Obwohl seine Frau ihn nicht begrüßt hatte, gab er sich völlig gelöst, denn er war bester Laune.（81 頁 24 行目 ）

帰宅した末造に対していつもは「お歸りなさい」と挨拶をする妻が、この時は黙っているという場面である。原文の「上さんがいつもする『お歸りなさい』と云ふ挨拶をしないでゐても、」という部分が、翻訳文においては„Obwohl seine Frau ihn nicht begrüßt hatte,

58 藤濤 『翻訳行為と異文化間コミュニケーション —機能主義的翻訳理論の諸相—』 37 頁 9～10 行目

「上さんが挨拶をしないでゐても、」“と訳されていて、「いつもする『お歸りなさい』と云ふ」という部分が省略されている。ドイツ語圏では、日本語の「お歸りなさい」に当たる挨拶は、通常は存在しないために省略されたのであろう。したがって、この省略の理由は、日本とドイツ語圏の間にある言語と習慣上の差異であると言える[59]。

B2）日本文化圏の事象に関する背景知識の差の考慮による省略

B2－1) 無聊に苦んでゐるお玉は、その窓の内で、暁斎や是眞の畫のある團扇を幾つも挿した團扇挿しの下の柱にもたれて、ぼんやり往來を眺めてゐる。（355 頁 2 行目 ）

Müßig an den Pfeiler gelehnt, saß Otama, von Langeweile gequalt, unter dem Fächerhalter, an dem viele bemahlte Fächer steckten, und schaute träumerisch dem Treiben auf der Straße zu.（91 頁 4 行目 ）

お玉がぼんやりと往来を眺めている場面である。原文の「暁斎や是眞の畫のある團扇」が翻訳文では„bemahlte Fächer「畫のある團扇」“と訳されていて、「暁斎や是眞の」という日本文化圏の固有名詞を含んだ部分が省略されていることがわかる。

B2－2) 詞遣が上品で、お家流の手を好く書く。お玉が手習がしたいと云つた時、手本などを貸してくれた。（360 頁 1 行目 ）

Sie bediente sich einer vornehmen Ausdrucksweise und verstand es, mit leichter Hand die Schriftzeichen aufs Papier zu malen. Als Otama zu erkennen gegeben hatte, daß sie gern das Schreiben lernen würde, hatte sie ihr ein Buch mit Musterzeichen geliehen.（95 頁 32 行目 ）

お玉の右隣に住む裁縫の師匠をしているお貞という女性を説明した場面である。原文の「お家流の手を好く書く」という部分が翻訳文においては„verstand es, mit leichter Hand die Schriftzeichen aufs Papier zu malen「手を好く書く」“と訳されていて、「お家流の[60]」という、つまり B2－1)同様、日本文化圏の固有名詞を含んだ部分が省略されているのだ。

以上、言語・文化の差異に着目し、ドイツ語圏の読者の理解を促すために、どのような理由と規模で翻訳者が省略という手段を用いているかということを考察した。これにより、省略の規模の大小に共通し、日本とドイツ語圏の間にある言語と習慣上の差異があるためと、日本文化圏の事象に関する背景知識を考慮したためという理由で省略が用いられていて、これらが翻訳書の読者の理解を促す上で有効であるということが証明された。前者は、

---

59 千野栄一は、「翻訳できるものと翻訳できないもの　―言語学的見地から―」（ 岩波書店 ） 1982 年 237 頁下段 9～16 行目において、「呼びかけや挨拶が、翻訳者にとって難題を提供するのは、これらの表現が伝達の機能を担っていないので訳せないことに由来している。翻訳というものは、伝達の機能を訳すのが第一義的であるのに、いわゆる phatic（ 交話的 ）な機能、人間間の接触への指向は言語の持つ別な機能であり、しかも、言語がこの機能を生かそうとする状況が限定されていることと、それぞれの言語集団においてその状況のあり方が一致していないことが、呼びかけや挨拶の翻訳を難しいものにしているのである」と述べて、挨拶を翻訳することの困難性の理由を明確にしている。

60 お家流とは、森鷗外 『森鷗外全集　第三巻』（ 筑摩書房 ） 1968 年　326 頁　拾陸 （ 一三)によると、「伏見天皇の皇子尊円親王に始まる書道の一派。江戸時代の公文書はこの書体に限られた」というものである。

日本語とドイツ語との言語上の差異により、訳すことが困難であるために省略されたものであった。つまり、翻訳者が敢えて省略をしようと意図したというよりも、省略せざるを得なかったということになる。仮に無理に訳をしたとすると、翻訳言語の文体において不自然な表現となり、翻訳書の読者が違和感を覚えることになるとおもわれる。それに対して後者では、ドイツ語圏読者の日本文化圏の事象に関する背景知識を考慮したことが、省略の理由であった。この省略は文全体という大規模に行われることもあれば、それ以下の小規模でも行われることもあり、頻繁に行われ得る。とりわけ、翻訳者は注を付けないという手法を採っているので、読者の読みをスムーズにさせるために有効と考えて行ったのだろう。あまりに理解不能な固有名詞が頻繁に登場すると、読み進める意欲が落ちるという経験から鑑みても、裏付けられる。当該の事例における日本文化圏の事象は、ドイツ語圏読者にとっては馴染みの薄い、理解の難解な事象であり、原文を日本語で読み得る読者との間の背景知識には、大きな差異があると言える。藤濤も「なじみのない名前を翻訳文に全く入れない方法もある。別名に変えたり、あるいは固有名詞の痕跡を全く消して普通名詞としたり、あるいは省略するような場合さえある[61]」と述べているように、「読者にとって距離感[62]」を生むことやテクスト理解の困難性を排除するために、これらの省略をしたものと判断することができる。この省略は読者の混乱を防ぐ効果を発揮する。

日地谷・キルシュネライトは、省略について「彼がその部分を理解出来なかったのか、あるいはその意味を納得出来なかったのかは解らない。しかしその様な介入により翻訳者は、自らの権利を明らかに超えてしまう。彼は作品のバランスを変えてしまい、加えて最も悪い事に、削除や修正を明示しない事により、オリジナル作品と読者の双方を裏切る事になるのだ[63]」と述べ、さらには、省略を「自分勝手な脚色[64]」と呼び、省略に対して否定的な立場を取っている。このように、省略に否定的な意見も見られる。確かに、省略を行うということは、その省略対象となった部分が原文には存在していたということが、翻訳書のみを読んだ読者には全くわからなくなってしまうため、原文への忠実性を欠くと捉える立場を理解することはできる。省略されたことにより、翻訳書の読者が知りうる情報が減少し、彼らや原文作者が不利益を被る可能性は否定できないであろう。しかし、本稿での事例のように、省略せざるを得ない場合や、省略することにより読者のテクスト理解を容易にし、読書意欲を損なわせないという前向きな省略が存在するということを確認することは、読者が翻訳書を正確に理解して読み進めることを重視し翻訳というものを捉えるために、有意義であると言える。

4.2.2. 加筆

---

61 藤濤 『翻訳行為と異文化間コミュニケーション　―機能主義的翻訳理論の諸相―』 60 頁 14～16 行目
62 同上　60 頁 4～5 行目
63 日地谷・キルシュネライト 187 頁下段 9～14 行目
64 同上　7～8 行目

加筆とは、「ST に含まれていない要素を加える[65]」ことである。すなわち省略の対極にある行為である。そして、原文の要素を削除するという省略よりは、原文を補うという効果を持つ加筆に対しての方が、否定的な見解が少ない。しかし、省略同様、原文に翻訳者が独自の判断で手を加えることなので、その効果は読者の翻訳文理解にとって有益でなくてはならない。本項では、個々の事例がなぜ加筆されたのかを分析し、その理由により事例を分類する。尚、事例中の下線部の付してある部分が加筆されている部分である[66]。

A) 日本の生活習慣理解補助のための加筆

A – 1) Die Magd, die ihre Arbeit in der Küche gerade beendet hatte, trat ins Zimmer, nahm das Bettzeug aus dem Wandschrank, richtete am gewohnten Platz die einzelnen Schlafstätten und spannte das Moskitonetz aus.（79 頁 30 行目 ）

女中が勝手から出て來て、極まった所に床を取つたり、蚊帳を弔つたりする。（343 頁 6 行目 ）

末造の家の風景を説明した描写である。原文の「極まった所に床を取つたり、」という部分を訳す際に、„nahm das Bettzeug aus dem Wandschrank,“を加筆し„nahm das Bettzeug aus dem Wandschrank, richtete am gewohnten Platz die einzelnen Schlafstätten und“と訳しているので、つまり「押入から布団を取り出してから、床を取る」という日本の生活習慣をドイツ語圏の読者により想像し易くするという効果を生んでいる。

A – 2) Wegen der Hitze hatte man die Schiebetüren zu beiden Seiten des Ganges entfernt.（80 頁 27 行目 ）

この頃はあの廊下の所の障子がはづしてある。（344 頁 5 行目 ）

末造の家の様子を説明した場面である。「障子がはづしてある」という原文の状況をドイツ語圏の読者にとってより理解し易く伝達するために、„Wegen der Hitze「暑さのために / 暑さが原因で」“と、„zu beiden Seiten「両側にある」“を加筆している。それにより、日本の家屋についての知識のないドイツ語圏の読者の理解をより深めることに成功していると言える。

A – 3) Das Mädchen schien die Magd der Frau zu sein. Wie die anderen Mädchen trug es einen leichten Sommerkimono, dessen Ärmel für die Hausarbeit mit veilchenfarbenen Musselinbändern hochgebunden waren.（108 頁 8 行目 ）

その娘は女中だつたと見えて、稽古に隣へ來てゐると云ふ外の娘達と同じやうな湯帷子を着た上に紫のメリンスでくけた襷を掛けてゐた。（373 頁 7 行目 ）

---

65 注 42 参照。

66 上段に翻訳文 *Die Wildgans* における表現を、下段に原文『雁』における表現を記す。尚、括弧内の頁数と行数は、Ôgai Mori: *Die Wildgans.* Roman Aus dem Japanischen übersetzt und mit einem Nachwort versehen von Fritz Vogelgsang. Zweite Auflage. Frankfurt am Main（Insel Verlag）1991 と森林太郎 『鷗外全集著作篇　第五巻』（ 岩波書店 ） 1951 年のものであり、その事例が載っている最初の頁数と行数である。

梅という女中の様子を説明した場面である。原文の「襷を掛けてゐた」という部分を訳す際に、„für die Hausarbeit「家事をするために」“を加筆している。この加筆により、日本の衣服文化についての知識を持たないドイツ語圏の読者にも、「襷を掛けてゐた」という状況がより想像し易いようにできている。

B) 日本文化圏の事象に関する理解を深めるための加筆

B – 1) etwa in der Mitte zwischen seinem eigenen Haus, das neben dem herrschaftlichen Anwesen des Schriftstellers Genichiro Fukuchi stand, und dem >Renkyokan< , einem Gasthaus, das berühmt war für seine Nudelsuppen (25 頁 13 行目)

自分の住まつてゐる福地源一郎の邸宅の隣と、その頃名高かつた蕎麥屋の蓮玉庵との眞ん中位の處で (287 頁 5 行目)

末造が物件を探している場面である。原文の「作家・新聞記者[67]」であった「福地源一郎」という人物を訳す際に、„Schriftsteller「作家」“を加筆している。この加筆により、単に *Genichiro Fukuchi* と音訳するだけでは伝達できない情報を付加することができていて、福地源一郎という人物を知らないドイツ語圏の読者の理解がさらに深まるという効果が生まれている[68]。

B – 2) Denn im zweiten Dezennium der Meiji – Ära galten weithin noch die Sitten und Gebräuche der Kaufmannsschicht des alten Edo, das nun Tokio hieß. Daher war es üblich, daß sogar die Dienstboten, die aus derselben Stadt stammten, außer in besonders dringlichen Fällen, nur am sogenannten >Dienstboten – Feiertag< nach Hause gehen durften. (129 頁 21 行目)

まだ明治十何年と云ふ頃には江戸の町家の習慣律が惰力を持つてゐたので、市中から市中へ奉公に上がつてゐても、藪入の日の外には容易に内へは歸られぬことに極まつてゐた。 (396 頁 10 行目)

明治初期の奉公人の立場について説明した場面である。原文の「江戸の」を訳す際に、„des alten Edo, das nun Tokio hieß「現在は東京という、以前の江戸の」“と訳しているので、江戸についての知識を持たないドイツ語圏の読者の江戸への理解がより深まるという効果が生まれる。

言語・文化の差異に着目し、ドイツ語圏の読者のテクスト理解を促すために、どのような理由で翻訳者が加筆という手段を用いているかということを考察した。これを通し、翻訳文読者の日本の生活習慣理解を補助するためと、彼等の日本文化圏の事象への理解を深めるためという理由で加筆が用いられていて、これらのテクスト理解の助長における有効性を確認することができた。両者の共通点は、ドイツ語圏の読者にテクストを理解させる

---

67 森 『森鷗外全集 第三巻』 323 頁 伍(一)

68 藤濤は、『翻訳行為と異文化間コミュニケーション —機能主義的翻訳理論の諸相—』 46 頁 7～9 行目で、人名・地名などの固有名詞について「意味を訳出すると身近な現実感を帯びるが、音のみでの訳では何の手がかりもないまっさらな音の連なりである」と述べている。それに対して、この事例における訳の方法は、意味の訳出と音訳の両方を用いた方法であるため、このような問題を乗り越えている。

ためには、原文をそのままの形で訳するというだけでは不充分であり、より詳しく補足として説明しなければならないという考えに基づき、加筆されている点である。これは、実際に異文化に属する人々に自分達が属する文化について伝達しようとする時に、相手の背景知識を考慮した上で補うべき知識を補足するということと同じで、異文化伝達において多用する方法である。前者は、日本の生活習慣理解補助のための加筆であった。これらの事例には、ドイツ語圏とは大きく異なる日本の生活習慣をドイツ語圏の読者に伝達するためには、どのような補助が必要であり有効かということが表れていて、異文化伝達の視点から見て大変興味深い。そして、これらの事例が日本の住生活と衣生活に関する加筆であるという特徴を見つけることができた。つまり、明治時代の日本と、ドイツ語圏の家屋と衣服は大きく異なるために、翻訳をする際にも読者の理解がより深まるように訳すことが必要なのである。続いて、後者は、日本文化圏の事象に関する理解を深めるための加筆であった。この加筆に属する事例はあまりに膨大だったため、その一部を挙げたが、人名、店名、そして地名等、種々の事象についての固有名詞が存在した。そして、多くのドイツ語圏の読者がこれらの固有名詞に関する知識を持たないであろうと考えられる。翻訳文の読者にとって馴染みの薄い異文化の事象は、省略で考察したように、省略の対象となる可能性もあるが、その全てを省略するはずはなく、省略されずに訳される場合があることは自明である。省略しない際には翻訳者がどのような手段を用いているのかということは、異文化伝達法の分析において注目に値する。藤濤は、「同じような場面であっても何をどのように言語で表現するかは、言語と文化により異なる。ある事柄や観点を言語で表現するかどうかが翻訳プロセスにより変化する現象を、明示化、暗示化という概念で表すことができる[69]」とし、さらに、クラウディ(Klaudy)は、明示化の種類を 4 つに分類していて、本稿の B – 1)はその中の一つである「語用論的明示化[70]」に該当する。語用論的明示化とは、「文化の違いから要求されるもの[71]」であり、「例えば、起点テクストの言語の共同体にとっては良く知られている、村や川の名前、または食べ物や飲み物の商品の名前は、目標テクストの読者にとっては何ら意味を成さない可能性がある[72]」ため、明示化されるもののことである。「例えば、翻訳者は *Maros* を'the river Maros'『ムレシュ川』と書いたり、*Fertö* を'Lake Fertö'『フェルテー湖』と書いたりする[73]」ということである。

これらの加筆は、ドイツ語圏の読者のテクスト理解にプラスの影響を与えていると証明

---

69 藤濤 『翻訳行為と異文化間コミュニケーション —機能主義的翻訳理論の諸相—』 77 頁 25 行目～78 頁 3 行目

70 King, Klaudy: "Explicitation." London and New York (Routledge) 2009 p. 106 l. 41 "Pragmatic explicitation"

71 同上 p. 106 l. 42 – 44 "Pragmatic explicitation of implicit cultural information is dictated by differences between cultures"

72 同上 p. 107 l. 1 – 5 "For example, names of villages and rivers, or of items of food and drink, which are well known to the source language community may mean nothing to the target – language audience."

73 同上 l. 5 – 7 "In such cases, a translator might, for instance, write 'the river Maros' for *Maros*, or 'Lake Fertö' for *Fertö*."

された。もし、加筆がある事象を解説する等の目的で、あまりに大幅に、そして何度もなされたとしたなら、読者がテクストを読み進める上で妨げになり得る。しかし、これらの事例のように、原文と翻訳文の読者が所属する文化圏の生活習慣との間に大きな差異が存在する場合や、翻訳文の読者が多くの知識を持っていないと考えられる事象に対し、的確な補足をするという形を採るなら、加筆は彼等のより深いテクスト理解に貢献していると言えるのである。

4. 2. 3. 誤訳

誤訳と一言で言っても、その定義は容易ではない。藤濤は、R. ギルの「原文への無知・無理解、またはウッカリによるものに限って、私は『誤訳』と呼びたい[74]」という言葉を引用し、「時間不足などからくるケアレスミスと、原文の文化背景および言語への知識不足からくる間違った訳や『妙な訳』が誤訳と言えそうだ。常識的には、こうした解釈で問題はないかも知れない[75]」と述べながらも、「翻訳を少々詳しく分析していくと読者や翻訳の目的といった別の要因も関係していることに気付くし、さらに厳密に考察していけば翻訳は全て誤訳ということにもなりかねず、一言で誤訳と言ってもその意味は多層的と言えよう。あるいは単に『原文とのズレ』と定義しても、光の当て方によっては『ズレ』の意味するところが変わる[76]」として、翻訳は全て誤訳ということにもなりかねないとまで言い、誤訳の定義の複雑性を主張している。そして、「訳文や訳語の成立したコンテクストを無視した誤訳評価は無意味となる。この立場からすると『誤訳』とは『翻訳の意図・目的にそぐわない原文とのずれ』と定義できよう。その際、『誤』訳という表現より『不適切』訳というべきである[77]」とまで結論付けている。しかし、明らかに誤訳であると判断されるものは存在する。本稿では、その明らかなものを誤訳と見なし取り上げるが、あくまで言語・文化の差異に着目して誤訳を定義する。つまり、翻訳者が日本の言語・文化を誤解して訳をしたということが明確な箇所を誤訳と位置付けることとする。

Die Wildgans には少なくない数の誤訳が存在したので、その一部を取り上げる。もちろん誤訳の数が多いことは残念であるが、ある程度の誤訳が存在することは仕方のないことであろう。前田は、「誤訳なしに長編小説を訳すことは不可能に近い[78]」と、そして千野も、「そもそも訳者は、訳している本の内容について知っていないと思いがけない誤りをする[79]」と述べている。無論、翻訳者の誤りを責めるのではなく、その原因を追究したい。したがって、言語・文化の差異に関するどのような要素が異文化伝達としての翻訳において誤

---

74 藤濤文子 「『誤訳』概念についての一考察 ―『誤訳』に見る異文化―」、(神戸大学ドイツ語教室) 1991 年 77 頁 9~10 行目, 注 1)と 4)
75 同上 11~13 行目
76 同上 79 頁 21~26 行目
77 同上 83 頁 10~13 行目
78 前田 18 頁 2 行目
79 千野 231 頁下段 2～3 行目

訳を招き得るのかといった視点から事例の分析を行う。尚、事例中の下線部の付してある部分が誤訳の生じている部分である[80]。

A）日本語そのものへの誤解

A－1） 眞實と作爲とを綯交(なひまぜ)にした末造の言分けが、一時お上さんの嫉妬の火を消したやうでも、その効果は勿論 palliatif なのだから、無縁坂上に實在してゐる物が、依然實在してゐる限は、蔭口やら壁訴訟やらの絶えることはない。（336 頁 8 行目 ）

Die aus Wahrheit und Phantasie zusammengezwirnte Geschichte, mit der sich Suezo aus der Klemme gezogen hatte, vermochte zwar um ein Uhr nachts die Flammen der Eifersucht im Herzen seiner Frau zu löschen, doch ihre Wirkung war natürlich palliativer Natur; denn solange die gewisse Person in Muenzaka existierte, hörten auch die Schwätzereien und das Gemunkel nicht auf.（73 頁 2 行目 ）

妾問題で夫婦仲に亀裂が生じている末造と妻の関係について説明している場面である。原文の「一時お上さんの嫉妬の火を消したやうでも」という部分を訳す際に、„vermochte zwar um ein Uhr nachts die Flammen der Eifersucht im Herzen seiner Frau zu löschen“と訳している。つまり、「一時」という表現の意味を誤解しているのである。この部分における「一時に」とは、「一旦は」という意味であるが、「(時刻が)夜一時に」という訳になっている。この事例においては、誤解が起き易い背景があった。それは、事例の前の文に「もう一時を過ぎてゐる」という表現を含んだ文があり、末造とその妻が喧嘩を終えて眠るのが「一時過ぎ」となっているというものである。したがって、翻訳者は「お上さんの嫉妬の火を消した」時刻が、「夜一時」であると誤解した可能性がある[81]。

A－2） ちよつと娘の内へ行つて見ようかと思つたが、なんだか改まつたやうな氣がして、我ながら不思議な遠慮がある。（307 頁 9 行目 ）

Einen Augenblick überlegte er sich: >Soll ich zu ihrem Haus gehen und nach ihr schauen?< Doch er hatte das Gefühl, als habe sich etwas verändert, und er empfand eine Befangenheit, über die er sich selbst verwunderte.（45 頁 29 行目 ）

---

[80] 注 43 参照。

[81] A－1)の前後に当たる『雁』のテクストは、以下の通りである。下線部が A－1)の誤訳であり、網掛け部分は誤訳を引き起こした背景になり得た表現である。

「だつてお前さんのやうにしてゐる人を、女は好くものだから、わたしやあ心配さ。」

「へん。あが佛尊しと云ふ奴だ。」

「どう云ふわけなの。」

「己のやうな男を好いてくれるのは、お前ばかりだと云ふことよ。なんだ。もう一時を過ぎてゐる。寝よう寝よう。」

眞實と作爲とを綯交にした末造の言分けが、一時お上さんの嫉妬の火を消したやうでも、その効果は勿論 palliatif なのだから、無縁坂上に實在してゐる物が、依然實在してゐる限は、蔭口やら壁訴訟やらの絶えることはない。それが女中の口から、「今日も何某が檀那様の格子戸をお這入になるのを見たさうでございます」と云ふやうな詞になつて、お上さんの耳に届く。しかし末造は言分けには窮せない。

お玉の父親の心境を説明した場面である。原文の「娘の内へ行つて見よう」という部分を訳す際に、„zu ihrem Haus gehen und nach ihr schauen“と訳している。これは、「行くことを試みたい」という意味である「行つて見よう」という表現を、「『行く』そして『見る』」と考えたことにより生じた誤りである。

B) 日本文化圏の事象への誤解・認識不足

男は存外造作なく満足して、「半助でも二枚ありやあ結構だ、姉えさん、お前さんは分りの好い人だ、きっと出世しますよ」と云つて、覺束ない足を踏み締めて歸つた。（359 頁 6 行目 ）

Schneller, als sie erwartet hatte, gab sich der Mann zufrieden.

>>Na, das ist zwar nur eine halbe Hilfe, aber weil es zwei sind, will ich's gut sein lassen. Sie sind vernünftige Person, mein Fräulein. Sie werden es im Leben gewiß noch weit bringen.<< Mit diesen Worten schwankte er, zögernd einen Fuß vor den andern setzend, dem Ausgang zu.（95 頁 13 行目 ）

お玉の家に男がやって来て、合力をしてくれと頼んでいる場面である。原文の「半助」という部分を訳す際に、„eine halbe Hilfe“と訳している。つまり、字義通り「半„halb“」、「助„Hilfe“」と理解し、訳したのである。「半助」とは、「(一円を円助といったところから) 一円の半分。五〇銭[82]」のことであるが、翻訳者はこの日本文化圏の事象を誤解した、もしくはこの事象への認識不足だったと言える。半助というもの自体を翻訳者は知らなかったのだろう。この誤訳は A)にも入り得るが、日本語文化圏特有の事象について認識不足であり、誤解したという側面が、日本語そのものへの誤解よりも大きいと考えられるため、敢えてこの分類へと振り分けた。

どのような要素が異文化伝達としての翻訳において誤訳を招き得るのかといった視点から、日本の言語・文化を誤解して訳をしたということが明確な箇所を誤訳と位置付け、明らかに誤訳であると判断されるものを考察した。これにより、誤訳が生じた理由には、まず日本語そのものを誤解しているということがあり、次にとりわけ日本文化圏の事象を誤解している、またはそれに対して認識不足であるということがあると、明らかになった。前者に当てはまる事例は数多く見られたのであるが、それらにはかなりの類似性が認められることが確認できた。多義語や複合動詞の誤解が顕著に見られたのである。つまり、翻訳者が誤りを犯しやすいポイントというものがそれぞれ個人的に存在しているのではないかと考えられる。翻訳者が単独で翻訳を進めた場合、その翻訳者一個人にとって特徴的な誤訳が生み出されるとおもわれる。したがって、例えば自身がその訳について正当性を確信できない際には、原語を母語とする人物に質問をする等、自己判断のみに従わないよう、柔軟な態度で翻訳に取り組むべきであろうと確信する。本稿で取り扱った事例においても、もし翻訳者がドイツ語に精通した日本語を母語とする人物等との共同での翻訳やそのような人物への質問等という選択をしていたとしたら、防ぐことが容易であるとおもえるよう

[82]『日本国語大辞典　第二版』

な誤訳ばかりであった。後者は、単に日本語の解釈を誤ったというよりも、その日本文化圏の事象に対する翻訳者の認識が不足していたために、誤訳が起きたのだと考えられる事例であった。翻訳者自身が原語の文化圏の事象を詳細に把握していないと、誤った、若しくは、ずれた訳をしてしまう。翻訳者が原語の文化圏の事象を熟知しているということが、原語に精通していることと並んで、重要であると判断できる。

これらの事例については、翻訳者の日本語や日本文化に対する知識不足が多少なりとも引き金になっているということは否めない。したがって、翻訳者は原語を母語としその文化の背景知識が豊富な人物と共訳する、もしくは助言を求めるべきであるという結論に達する。

5. 結語と今後の展望

翻訳という行為において言語・文化間の差異をつなぐためには、単に原文に書かれている要素のみをそのままコピーするという発想では不充分であり、それらの差異に応じて訳出方法を変えることや、省略すること、もしくは加筆することが必要であることが証明された。原文をそのまま伝えることのみに縛られるのではなく、言語・文化間の差異に応じて削除することになる部分と補足すべき部分が存在するということを積極的に認めるべきであるとおもう。そして、このような手段を分析することで異文化コミュニケーションにおいて必要とされる行為も、具体的に明示できるのである。

本稿では、『雁』と *Die Wildgans* の分析に焦点をしぼったが、今後は原文に対して翻訳文が複数個存在している作品の分析や、現代の作品の分析等を、翻訳された目的もさらに考慮して取り組みたい。さらに、翻訳のみに捕らわれず、日本とドイツ語圏間の異文化コミュニケーションの要素が含まれる他の情報にも目を向け、日本とドイツ語圏間の異文化コミュニケーションについての考察をさらに深めていきたい。

参考文献

DUDEN Das Fremdwörterbuch Band 5. Mannheim, Leipzig, Wien und Zürich (DUDENVERLAG) 1997

DUDEN Das große Wörterbuch der deutschen Sprache in 10 Bänden. Mannheim, Leipzig, Wien und Zürich (DUDENVERLAG) 1999

Haschke, Barbara / Thomas, Gothild: *Kleines Lexikon Deutscher Wörter japanischer Herkunft von Aikido bis Zen.* München (Verlag C. H. Beck) 2008

King, Klaudy: “Explicitation.” in: Baker, Mona / Saldanha, Gabriela ed. *Routledge encyclopedia of translation studies second edition.* pp. 104 – 108 London and New York (Routledge) 2009

Mori, Ôgai: *Die Wildgans.* Roman Aus dem Japanischen übersetzt und mit einem Nachwort versehen von Fritz Vogelgsang. Zweite Auflage. Frankfurt am Main (Insel Verlag) 1991
The International House of Japan Library: *Modern Japanese literature in translation A Bibliography.* Tokyo, New York and San Francisco (Kodansha International LTD.) 1979
編集顧問　岩崎英二郎、池上嘉彦、Prof. Dr. Franz Hundsnurscher　編集主幹　川島淳夫　編集副主幹　橘好碩、麻生建　責任編集委員　荻野蔵平、木藤冬樹、幸田薫、島田勝、吉田有 『ドイツ語言語学辞典』(紀伊國屋書店) 1994 年
オールピッツ, フリッツ 「リュッセルスハイム　1972　―日本学の歴史的回想―」、『姫路人間学研究』所収、第 3 巻　第 1 号、 徳永光展訳　2000 年　123～137 頁
キーン, ドナルド 「日本近代文学の外国語訳」、雑誌『文学』編集部 『翻訳』所収、(岩波書店) 1982 年　171～176 頁
鈴木文子(藤濤文子)『日本文学のドイツ語訳に見る異文化間コミュニケーション行為の事例研究』(平成 14 年度~平成 15 年度科学研究費補助金　基盤研究　((C))　((2))　研究成果報告書) 2004 年
千野栄一 「翻訳できるものと翻訳できないもの　―言語学的見地から―」、雑誌『文学』編集部 『翻訳』所収、(岩波書店) 1982 年　230～241 頁
徳永光展 「独訳『草枕』の脚註　―日本事情的語彙の解説をめぐって―」、『国語教育の理論と実践』所収、第 33 号 (両輪) 2001 年　470～485 頁
徳永光展 「『坊っちやん』にみる日本　―独訳*„Der Tor aus Tokio“*をめぐって―」 関一雄『一の坂川　姫山　国語国文論集』所収、(笠間書院) 1997 年　252～275 頁
日本国語大辞典第二版編集委員会小学館国語辞典編集部 『日本国語大辞典　第二版』2001~2002 年
日地谷・キルシュネライト, イルメラ 「日本文学の翻訳は不可能か」、『群像』所収、第 49 巻　第 11 号 (講談社) 1994 年　182～190 頁
平野栄久 「翻訳についての一考察　―体験的・実感的に―」、吉田金彦 『ことばから人間を』(昭和堂)所収、1998 年　254~267 頁
藤濤文子 「『誤訳』概念についての一考察　―『誤訳』に見る異文化―」、『ドイツ文学論集』所収、第 20 号 (神戸大学ドイツ語教室) 1991 年　75~90 頁
藤濤文子 「日独翻訳にみる異文化コミュニケーション行為」、『ドイツ文学論集』所収、第 34 号 (神戸大学ドイツ文学論集刊行会) 2005 年　31~50 頁
藤濤文子 「比喩表現の翻訳について」、『ドイツ文学論集』所収、第 36 号 (神戸大学ドイツ文学論集刊行会) 2007 年　31~53 頁
藤濤文子 『翻訳行為と異文化間コミュニケーション　―機能主義的翻訳理論の諸相―』(松籟社) 2007 年
藤濤文子 「翻訳評価における注のコミュニケーション機能について」、『ドイツ文学論集』

所収、第 33 号 （ 神戸大学ドイツ文学論集刊行会 ） 2004 年　27~38 頁
藤濤文子 「翻訳評価のためのコミュニケーション的分析」、『ドイツ文学論集』所収、第 29 号 （ 神戸大学ドイツ文学論集刊行会 ） 2000 年　41~64 頁
北條文緒 『翻訳と異文化　原作との＜ずれ＞が語るもの』（ みすず書房 ） 2004 年
前田尚作 『日本文学英訳分析セミナー』（ 昭和堂 ） 2006 年
森鷗外 『森鷗外全集　第三巻』（ 筑摩書房 ） 1968 年
森林太郎 『鷗外全集著作篇　第五巻』（ 岩波書店 ） 1951 年

参考インターネットサイト

Japonica Humboldtiana 2.: Mori – Ôgai – Gedenkstätte. 1998
http://www2hu-berlin.de/japanologie/dokumente/publikationen/ogaibibl.pdf
Mori – Ôgai – Gedenkstätte
http://www.2.hu-berlin.de/japanologie/?jp=Rundgang_jp
iudicium Verlag
http://www.japan.de
J – GLOBAL
http://jglobal.jst.go.jp

（ 小樽商科大学非常勤講師 ）